

■ 研究発表論文

明治初期の岩倉使節団に見るパリの都市公園の捉え方

Understanding of the Urban Parks in Paris by the Iwakura Mission early in the Meiji Era

佐々木邦博*

Kunihiro SASAKI

摘要：1871年（明治4年）に明治新政府は岩倉使節団を欧米諸国に派遣した。その目的の一つに各国の近代的諸制度や文物の調査があり、帰国後に久米邦武により「米欧回覧実記」としてまとめられる。本研究の目的は明治初期に西洋諸国について記した代表的な書物であるこの著作において整備直後のパリの公園がどのように把握されていたのかを探ることにある。分析の結果、公園は街路樹のある道や広場と一体となった姿で全体を把握された上で高く評価されていること、そして社会政策上の遂行目的とされていることが、公園を社交の場であり美しい場所としたパリ以前に訪れた都市の公園の説明と異なり、パリの公園の特徴とされていることが判明した。

1. 研究の目的

江戸時代末期である1854年（安政元年）に徳川幕府は欧米諸国に迫られる形で鎖国をといた。その後、幕府は条約の批准や外交交渉のために欧米に使節団を何度か派遣する。幕府が倒れ、1868年（明治元年）に明治新政府が樹立されてからも使節団が派遣されている。それらの中できわめて重要な人物が入り、規模が大きく、しかも長期間にわたったものは、近代国家の建設方針を見定めようと1871年（明治4年）にアメリカ合衆国とヨーロッパ諸国を視察するために出発した岩倉使節団であった。右大臣岩倉具視を特命全権大使とし、参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通、工部大輔伊藤博文、外務小輔山口尚芳を副使とする総勢46名の団体である。彼らは新政権のエリートたちであり、途中で帰国したものもいるが、12カ国を訪問し、1873年（明治6年）に帰国する。約1年9カ月の滞在であった。

この使節団をさらに有名にしたのは、帰国後に公式の報告書である「特命全権大使米欧回覧実記」が著され、公刊されたことである。訪問した国々の地理、政治、経済、文化、産業など、あらゆる分野を記述したこの本は全100巻からなり、5編5冊にまとめられて太政官記録掛より刊行されている。本の著者は大使随員の権少外史、久米邦武であった。この本は公刊後いろいろなところへ寄贈されたが、申し込みが多く、その結果増刷を重ね、最後には発売されている。海外の実状を知るために重要視された書物だといえよう。この「実記」（以降この書物を略して実記と著す）は1975年に宗高書房より復刻され、さらに1977年から82年にかけて岩波書店から文庫版として出版されたことにより、一躍注目を浴びることとなった。筆者もこの時に注目した一人である。使節団が見学した場所の中には公園や庭園が含まれており、その記述が「実記」の中に散見されたのである。1993年には田中彰氏などにより『米欧回覧実記』の学際的研究¹⁾が出版され、この実記に関する研究の現時点での集大成が計られている。

造園の分野においてこの書物に言及しているのは針ヶ谷鐘吉氏による「庭園」という名の起源²⁾、「開化期の海外都市公園論」³⁾、「幕末・開化期のセントラルパーク」⁴⁾、「開化期海外渡航者の西洋庭園観」⁵⁾という小論がある。さらに自然公園に関して「日本人が最初に踏破した国立公園」⁶⁾の中でこの「実記」を引用している。針ヶ谷氏はこれら一連の小論の中で「公園」「庭園」という用語の起源とその意味の問題を述べ、そして「実記」の中

にある公園、植物園、動物園、博物館について書かれた記述、及び欧米と日本とを比較対照した記述を紹介して説明している。また木村三郎氏も同時期に「文明開化の中の日本の公園（苑）観」⁷⁾、「東京市区改正と街路樹問題」⁸⁾、「造園事情の日米欧交流の歴史的系譜と評価」⁹⁾の論文を記し、この著作は、明治初期における海外の造園事情の紹介にきわめて役立ったとし、その意義を高く評価している。さらに白幡洋三郎氏も「近代化の中の公園」¹⁰⁾の論文においてこの著作と幕末使節団の公園観との違いを公園を都市の社会施設とみなしたことにあると分析している。柳五郎氏も「公園設置の近代化」¹¹⁾の論文の中でこの著作を取り上げ、特に公園の制度と設置方法を欧米視察の中で得たことに着目している。最近では俵浩三氏も「緑の文化史」¹²⁾の中で内容の一部を紹介している。以上が今まで「実記」の中の公園について書かれた文献である。

そこでこの論文の目的だが、各都市において公園の成立の背景も空間の構成も異なっているので、岩倉使節団が訪れた都市の中で美しいとされたパリを事例として取り上げる。「実記」の中のパリの記述を分析し、さらにパリの資料と比較することにより「実記」において記述されていること、されていないことを探り、この著作において人工的に整備されたパリの緑がどのように捉えられているか、また著者はどこに着目したのか、著者のパリにおける公園及びそのシステムに対する理解を明らかにしていきたい。

2. 久米邦武と「米欧回覧実記」

まずこの「実記」を書いた久米邦武の経歴だが、1985年に久米美術館で開催された「久米邦武と『米欧回覧実記』展」のカタログ¹³⁾に年譜が記載されるなど詳しいので、この本を参考に簡略にまとめる。彼は1839年（天保10年）に肥前佐賀藩士久米邦郷の三男として生まれた。幼少の頃から漢文学に親しみ、16歳の時に藩校である弘道館に入学、漢学を学び、5年後に卒業している。その後、江戸にある昌平坂学問所¹⁴⁾に入学、翌年退学して帰藩する。藩主鍋島直正の近習となった。1871年（明治4年）の廃藩置県の後に鍋島家とともに上京、11月に新政府の権少外史となり、特命全権大使岩倉具視の米欧諸国派遣に随行するのである。帰国後、太政官記録課長などを歴任し、一貫して記録の編集執筆に携わり、1878年（明治11年）にこの「実記」を刊行する。その後国の歴史を編纂する修史館に務め、「大日本編年史」の編集

*信州大学農学部森林科学科

に携わる。廃館後も同じ使命を受けた臨時修史局に配属され、この組織はそのまま帝国大学に移管される。文科大学教授となった。その後実証史学の確立に務め、史学会設立に努力したが、1892年(明治25年)に「神道は祭天の古俗」事件¹⁴⁾で免官された。1899年(明治32年)以降は東京専門学校(後の早稲田大学)で教鞭を執り、国史と古文書学の研究を進める。1931年(昭和6年)93歳で死去した。このように久米邦武は漢学を素養としながらも「実記」を書き記し、その後は実証史学の基礎をつくることに貢献したのである。

さてこの「実記」はこの使節団の米欧諸国訪問を記したものである。1871年(明治4年)11月12日にこの使節団は横浜を出港し、サンフランシスコに向かった。その目的は3点あり、まず幕末以降の条約締結各国への国書の捧呈、次に条約改正の予備交渉、三点目は各国の近代的な制度文物の調査研究であったが、条約改正問題の交渉が失敗に終わったため、結果的に第三の目的に最も力を注ぐことになった。¹⁵⁾この点は幕末期の他の遣外使節団が目的としなかったことである。¹⁶⁾岩倉使節団はアメリカ合衆国を訪れた後、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスとヨーロッパ11カ国を訪問し、1873年(明治6年)9月13日に横浜に帰着している。「実記」はこの記録なのである。

3. 「米欧回覧実記」の構成と特徴

「実記」の冒頭に例言が載せられているが、この中で「実記」の構成が説明されている。まとめると4点になるが、第一には全体が日記の体裁をとること、すなわち訪れた順番に書くということである。第二点は同じことは二度繰り返して書かないということである。よって先に訪れた国にどうしても書く比重が置かれ、その結果初編(アメリカ合衆国)では風物が特に記述の中心となり、二・三編(イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ)では工芸生産が特に記され、四・五編(他のヨーロッパ諸国)では前に訪れた国々と異なっていることが中心となったことを記している。第三には各国及びその首都の記述においては冒頭に総説を起し、地理的な説明をしていることがある。そして最後の点だが、2字分下げた記述があり、それは著者の論説であるとしている。また風景や建築を説明するために300あまりの銅版画が挿入されている。以上が「実記」の構成であるとともに特徴をなしている点である。

4. パリの公園及びそのシステムの捉え方

岩倉使節団は1872年(明治5年)11月16日にパリに到着し、翌年2月17日にベルギーに向けて出発している。その間に太陰暦から太陽暦への改暦があったので、パリには63日間滞在したことになる。この時この使節団はパリとその近郊以外訪れてはいない。「実記」は第41巻から第48巻にわたってフランスの総説とパリでの訪問を記している。この中でパリの都市公園や街路樹の記述はいくつか見受けられるが、特にまとまった記述はパリの概要を説明した箇所とビュットショモン公園の箇所である。この2ヶ所から取り上げていく。

都市の概要は到着した翌日、すなわち11月17日の記述の中に著されている。¹⁷⁾最初に使節団が逗留した館のそばにある凱旋門を説明し、都市の説明にはいる。地理的位置と歴史を簡略に説明した後、地域の特徴を述べるのだが、セーヌ河の北側を宏大な官庁街、シテ島を市街地で商店街、そして南岸を「苑観廣達ヲ開キ、緑樹ヲウエ、清爽宏麗、人ヲシテ廣范ノ景象中ニ、居住セシム」とその特徴を描き、また東北は職工の街と述べている。そしてパリの壮麗さをたたえるのである。この後で具体的な説明が始められるのだが、その順序が特徴的である。すなわち凱旋門のあるシャ

レル・ド・ゴール広場から都市の軸を形成しているシャンゼリゼを説明し、さらにその終点であるコンコルド広場を中心にして四方に広がる街を説明しているのである。先ほどの地域でいえばセーヌ北岸の中心街だけが対象となっている。この中で著者が感動しているものはコンコルド広場に隣接したチュイルリー宮殿(現存せず)前からシャンゼリゼを通して凱旋門を眺める直線的な景観であり、幅広く4重の街路樹を持ち白亜の建物が並ぶシャンゼリゼを第一に取り上げ、それよりは狭いながらもやはり白亜の建物に街路樹が並ぶブルヴァール・デジャリアンをパリで一番の美観とし、さらにパレ・ロワイヤルやアーケード街の賑わいを記している。またガス灯が醸し出す夜の様子も欠かさず記している。そしてパリ中の特徴としてカフェなどの飲食店を上げ、「樹陰ニ榻ヲオキ、遊客案ヲ對シテ飲ム、盛夏ニ涼ヲ納メ、晴夕ニ月ヲミル」と街路樹との取り合わせにも目を見張っている。そして最後に「全府ノ民ヲ、一ノ遊苑中ニオク、巴黎ノ市中、往ク所ミナ遊息ノ勝地アリ」と絶賛し、さらに「倫敦ニアレハ、人ヲシテ勉強セシム、巴黎ニアレハ、人ヲシテ愉悅セシム」とロンドンと対比させてパリの街の特徴を説明しているのである。

この中で都市の緑はどう位置づけられているのだろうか。シャンゼリゼ(広幅員道路ばかりでなく、コンコルド広場付近において道の両側に広がっている公園も含む)とパレ・ロワイヤル庭園の具体的な名が出てきているが、ここでむしろ重要視されているのが街路樹であり、それが市内中に溢れるように存在していることなのである。この点がパリの壮麗さ、記述された雰囲気、そして南側に広がる町の様子に欠かすことのできない重要な役割を担っている要素であることに著者は気がついているといえる。

ところで使節団が訪れたのは冬である。見ただけでは上記したような様子が見えるはずがないので、駐在していた日本大使やフランスの係官から十分な情報を得ていたことが想定される。

都市の概要説明の最後として、公園の説明が始まる。パリ中に70ヶ所の公園(原文では「公苑」、ただし「大苑」とか「廣苑」などの表記が「実記」中に見られるが、用語の問題は別個に論考したい)があるとし、コンコルド広場、リュクサンブール庭園、シャルル・ド・ゴール広場、バスチユ広場、シャトレ広場の名を上げ、「皆美ヲ盡シ潔ヲ極メタル苑園ナリ」と解説している。その後でさらにブローニュの森とビュットショモン公園の名を上げていくが、この項ではブローニュの森を取り上げ、ビュットショモン公園は後で詳述するとしている。この森の説明だが、「巴黎第一ノ廣苑」と紹介し「沼地ヲタ、エ、島嶼洲嘴ヲツ、リ、懸瀑ヲツクリ、樹木ハ老幹槎牙タルアリ、松籟颯々ノ林アリ」とその姿を形容している。さらに市民の利用についても言及し、日曜日の夕方には富裕な人々が馬車で来て着飾った姿を見せあうことも記されている。

これらの場所の捉えられ方であるが、最初に名を上げられた場所の多くは広場であり、リュクサンブール庭園には中心部に高木がなく、この点においては広場の構成と類似しており、整形的なデザインである。これらと区別する形で2ヶ所の公園が取り上げられ、自然風景が描写されている。都市内の整然とした広場と自然風景を模した公園とを区別して解釈しているといえよう。また公園の説明が都市の概略説明の最後になされていることは、公園を讀んでいることから察すると、パリの都市にとって大きな役割を担っているとみなしたからだと考えられる。

次に別項とされたビュットショモン公園だが、1月10日の記述の中にある。¹⁸⁾パリの東側、工場と労働者の住宅が広がっている中の丘にあることが説明され、ナポレオン3世がこの公園を築き、彼らに与えたと紹介している。さらに園内の丘、奇岩、岸壁、池、溪流、切り立つ島、ロトンド、吊り橋などを描写し、「巴黎ノ遊園中ニテ、眺望ノ潤ニシテ、山水ノ奇、雅韻アルハ、此苑ヲ



図-1 ボアデブロン公苑



図-2 同所吹上ケノ瀑

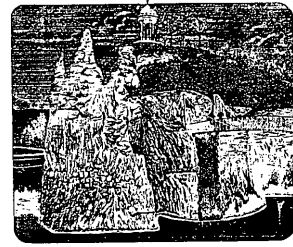


図-3 ビットショーモン公苑ノ泉石

以テ第一トスヘシ」とこの公園の特徴を述べ、高く評価している。

さらにこの項には論説が続いており、労働者への社会政策のことが記されている。すなわちナポレオン3世が統治した第2帝政期の政策の一つである工場労働者への持ち家政策、そしてそれに伴う労働者地区での道路や街灯などの社会資本整備が取り上げられ、これに絡めて「暇時ニハ此ニ運動スヘシ」として公園建設が理解されているのである。労働者に対する社会政策と公園建設の関係はパリ以前に訪れた都市の記述の中には書かれていない。そして日曜日にブローニュの森を歩いてもビュットショモン公園を歩いてもその爽快さは同一であるとするのである。ここで初めて著者による公園の理解が出てくるのだが、それは以上のように単に都市に欠かせない社会施設とされているだけでなく、社会政策上の重要な対象として把握されていることがわかるのである。

「実記」の中には都市の緑に関して他の記述も散見するが、「啞院」の中で高木に驚き、ヨーロッパの都市には高木が少ないという感想を述べていることが当時の都市内の樹木の様子を表現したものと見て貴重である。¹⁹⁾ 以上が「実記」の記述である。

ところでこの「実記」の執筆の原則だが、同じことを繰り返して書かないということがある。よって著者の公園理解を考えていく上でも先に訪れた国々での記述を見なければならぬ。それは使節団が最初に訪れた都市であるサンフランシスコの公園の説明の後にある論説に書かれている。²⁰⁾ 東洋と西洋を比較して述べているのだが、「西洋人ハ外ニ出テ盤遊ヲ樂ム、是一小邑モ必公苑ヲ修ムル所ナリ、東洋人ハ室内ニアリ、惰居スルヲ樂ム、故ニ家々ニ庭園ヲ修ム」と著者は考察しており、公園は都市に欠かせない社会施設であり、果たしている役割として社交を上げている。その後、ニューヨーク、ボストン、フィラデルフィア、ロンドン、グラスゴー、エジンバラにおいて公園が記述されているが、その度に公園を美しい場所、景勝を楽しむ場所とし、特に起伏を活かした眺望を評価することが記述の中心となっている。この二点がパリに至るまでの著者の公園に対する理解の最大公約的な特徴なのだが、これに対してパリの記述には別の観点が見受けられる。まずパリでは公園を美しいと語っているばかりでなく、都市を美しいと語っていることである。すなわち街路樹が植えられており、また各地の広場も著者により「公苑」と捉えられている姿である。そのような建築物と広場、街路樹、あるいは公園と一体となっている姿を美しいとしていることがパリの特徴なのである。また次に公園の捉え方がある。公園造りを単に社交の場の提供と捉えるばかりでなく、労働者への社会政策の一環でもあり、そこにすばらしい公園を建設していることに注目していた。道路や街灯と同様に必要な施設として捉え、日曜に散歩したり、暇なときに運動するための欠かせない場所として捉えていたのである。

5. 公園に対する記述と実際の記録との比較

パリの公園に関する基礎的資料にアルファンが著した「プロムナード・ド・パリ」²¹⁾がある。この大著は第二帝政期におこなわれたパリ都市改造の際の緑地計画（広場や街路樹のある道路を

含む）の記録であり、しかも出版は1867年から1873年と、使節団訪問とほぼ同時期の資料である。この時に造られた公園などの中で「実記」に詳しくその内容が記載されているのはブローニュの森とビュットショモン公園にすぎず、後は簡単な説明に終わっている。ふれられていない公園が多数残っているのである。例えばヴァンセンヌの森はブローニュの森に対して街の反対側である東側につくられた。ヴァンセンヌの城と練兵場まで訪問した記述はあるが、²²⁾ その周囲に広がる森にはふれられていない。また、パリで最も豪華で上品と言われたモンソー公園は一行が宿泊した館からわずか1kmしか離れていないが、この公園についてもふれられていない。市中に散見するスクウェアについても同様である。ところで当時整備されたパリの公園は面積により森、公園、スクウェアの3タイプに分けられて計画され、それぞれが市内に平等になるように組織的に配置された。ヴァンセンヌの森の内容はブローニュの森と匹敵するものであるが、利用のされ方は労働者の街にあるゆえにビュットショモン公園と変わらない。モンソー公園は中規模ながらも利用のされ方はブローニュの森と変わらない。スクウェアは「巴黎ノ市中、往ク所ミナ遊息ノ勝地アリ」という表現で代表されているかのようである。ゆえに繰り返して書かないという「実記」の原則の上に立つなら、取り上げられた2ヶ所、すなわち高級住宅地にある大規模な森と労働者街にある中規模な公園は、その規模と利用を説明する上できわめて効果的に選択されていることが判明する。

次に「実記」の記述と資料との比較だが、「実記」の中でブローニュの森の記述は前記したとおりで、他には銅版画が2枚（図-1、2）²³⁾ある。図-1には橋が見えることから2つある池の中の下池であり、図-2はこの池にある滝のようである。「プロムナード・ド・パリ」によると広大な森の中には多くの池、小川、芝地、3ヶ所の滝、馬車用と乗馬用と歩行者用とに分かれた園路、カフェ、レストランが配置され、さらにプレ・カタラン（いわば遊園地のような施設）、ロンシャン競馬場、鳩打ち場、氷室、禽獣園の施設があった。また森全体は優美な鉄柵で囲まれ、門があった。「実記」に記載されているのは広大な森の中で市街地よりある二つの大池、及び北端にある禽獣園に限定されている。これらはいずれも当時パリ市民の話題を呼んでいた施設であるにもかかわらず、全く触れられていない。この点から「実記」の公園の記述に関しては自らが直接見たことだけを書いているのではないかと考えられる。もちろん見ても書いていないこともある。入り口の門であり、守衛小屋、鉄柵なのだが、公園の他の要素と比べて重要視されなかったと考えられる。

ビュットショモン公園であるが、前記した記述に銅版画（図-3）²⁴⁾が添えられている。それを「プロムナード・ド・パリ」と比較するなら、書かれていないのはカフェ・レストランと売店と門と鉄柵にすぎない。次に配置を見てみると、主要な区域については書かれているのだが、園内の北部を鉄道が横切り、それを眺め見る適地であるトンネルの入口の上にカフェ・レストランが設置されていることにはふれられていない。当時の社会において全

国網が形成されていく鉄道が産業革命以後の社会の変化の一例として関心と呼んでいたこと、しかも新しく形成された公園内を鉄道が通る点におもしろさがあったことから察すると、このことにふれていないのは全く不自然である。ゆえに見なかったために書かなかったのではないかと推察されるのである。

以上のことから「実記」の記述の特徴として、説明する公園を慎重に選択していることが判明し、そして自ら見たことを中心に筆記していることが強く推察される。

次にこれらの公園の役割だが、この点はすでに次のように指摘されている。²⁵⁾ すなわち都市の衛生状態を改善するための施設であり、さらに街路樹のある道路や広場を含めた緑地総体をプロムナード、すなわち散歩を楽しむ場所として行政により認識されていた。「実記」には都市の衛生状態を改善する施設という説明はない。その理由だが、その目的は達成されていたと考えられる。すなわち下水道網（使節団も訪れている²⁶⁾）がすでに整備されることにより衛生状態が改善されており、この点に関する緑地の役割の重要性が弱まっていたのである。次の緑地全体（すなわち街路樹網が都市を覆っているので都市全体）がプロムナードという点だが、この点は「実記」の中でおさえられているといえる。すなわち建物と街路樹のある道路、広場を一体として理解している点である。「全府ノ民ヲ、一ノ遊苑中ニオク、巴黎ノ市中、往ク所ミナ遊息ノ勝地アリ」という表現もこの点を理解している例であろうし、またこのことから「巴黎ニアレハ、人ヲシテ愉悦セシム」とパリを表現しているといえる。

最後に、当時のパリの緑地総体は面積による区別と平等な配置というシステムを持って建設されている。「実記」にはシステム

に内在するこの特徴は記されていない。しかし著者はブローニュの森とビュットショモン公園を選んで説明していることから、この特徴を当然ながら理解していたと推測される。記さなかった理由だが、パリ中に街路樹のある道路と公園が整備されていることを記すほうがより重要であり、この特徴はそれに含まれてしまう二次的な要素と判断したのではないかと考えられる。

6. 結論

「実記」の中でパリは世界中でロンドンとしか比較しようがない大都市とされ、さらに比較された上でも絶賛されている。その理由はいくつかあろうが、公園や街路樹などもそのひとつとして上げられている。「実記」の中でパリの公園は、公園ばかりでなく街路樹、広場と一体になった姿で全体を把握された上で高く評価され、さらにその一部としても同様に高く評価されている。

公園は社交の場、美観を形成する場である都市施設と一般的に捉えられているが、特にパリの場合は労働者に対する社会政策上の遂行目的の一つともみなされている説明が加えられている。パリにおいて改めて公園が果たす社会的役割の重要性に目を向けているのである。

当時の資料とつきあわせてみるなら、著者は緑地のシステムを理解した上で説明すべき公園を選択し、そして実見したことを中心に記述していると考えられる。また、書くべきことはたくさんあったはずだが、著者は慎重に判断してより重要とみなしたことだけを書き記していると考えられる。

著者がパリでつかんだこと、それは以上のように緑豊かな都市であり、それが「力」になっている姿だったのではないだろうか。

参考文献

- | | | |
|--|--|--|
| 1) 田中彰、高田誠二編著 (1993) : 『米欧回覧実記』の学際的研究 : 北海道大学図書刊行会 | 50(4)、243-255 | 69-76 |
| 2) 針ヶ谷鐘吉 (1981) : 「庭園」という語の起源 : 庭(56)、37-39 | 10) 白幡洋三郎 (1982) : 近代化の中の「公園」 : 人文學報(53)、213-245 | 19) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、155-156 |
| 3) 針ヶ谷鐘吉 (1981) : 開化期の海外都市公園論 : 庭(60)、29-32 | 11) 柳五郎 (1982) : 公園設置の近代化 : 造園雑誌 46(2)、87-101 | 20) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.1、49-52 |
| 4) 針ヶ谷鐘吉 (1982) : 幕末・開化期のセントラルパーク : 庭(62)、51-56 | 12) 依浩三 (1991) : 緑の文化史 : 北海道大学図書刊行会、128-129 | 21) Jean Charles Adolphe ALPHAND (1867-73) : Les Promenades de Paris : J. Rothschild |
| 5) 針ヶ谷鐘吉 (1987) : 開化期海外渡航者の西洋庭園観 : 庭 (別冊 57)、130-134 | 13) 久米美術館編集 (1985) : 久米邦武と『米欧回覧実記』展、久米美術館 | 22) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、107-111 |
| 6) 針ヶ谷鐘吉 (1981) : 日本人が最初に踏破した国立公園 : 国立公園(383)、24-26 | 14) 神道は東洋一般に行われていた祭典の古俗であるという見解を「史学会雑誌」及び「史海」に発表し、これがもとで大学を追われた事件。 | 23) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、162と163の間 |
| 7) 木村三郎 (1981) : 文明開化の中の日本の公園(苑)観 : 都市公園(74)、2-9 | 15) 田中彰 (1985) : 久米邦武と『米欧回覧実記』、「久米邦武と『米欧回覧実記』展」所収、久米美術館 | 24) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、66と67の間 |
| 8) 木村三郎 (1984) : 東京市区改正設計と街路樹問題 : 都市公園(86)、2-8 | 16) 15) と同じ | 25) 佐々木邦博 (1988) : オスマンのパリ改造計画における緑地計画の理念及びその実体について : 造園雑誌 Vol.51(5)、43-48 |
| 9) 木村三郎 (1987) : 造園事情の日米欧交流の歴史的経過と評価 : 造園雑誌 | 17) 久米邦武 (1878) : 「特命全權大使米欧回覧実記」 : Vol.3、29-36
なおページ数は宗高書房の復刻版による | 26) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、98-100 |
| | 18) 久米邦武 (1878) : 同上書 : Vol.3、 | |

Summary : This study aims to reveal the understanding of the urban park in Paris, in "Bei-O Kairan Jikki". This book is official report of Iwakutra Mission sent by the Meiji government to U.S.A. and European countries at the beginning of the Meiji Era. One of its purpose was the survey on the modern social system and culture.

After analyzing it, it became clear that, while the urban park in U.S.A. and in Europe was generally understood as the place for the social intercourse and as the beautiful place, the urban parks in Paris, understood with the avenues, the boulevards and the places, were evaluated highly, and they were subjects on the social policy. And it became clear too that this book recorded mainly the thing looked by the author, concerning the urban park.